

令和 5 年 2 月

代表者聴取を見据えた聞き取り方について
【Q&A】

岩手県警察本部
刑事部捜査第一課
性犯罪捜査指導係

Q 代表者聴取とは？

A 警察、児童相談所、検察庁が協議し、代表者を通じて一括して被害状況等を聞き取る面接です。

代表者聴取での聞き取りは、原則1回、警察、児童相談所、検察庁のいずれかの代表者が児童から1対1で聞き取りを行います。

聞き取りの内容は録音録画され、その映像を証拠として裁判所に提出することが前提です。

児童が、何度も聞き取りされることにより記憶が書き換えられることを防ぐ目的と、被害に遭った又は事件を目撃した状況を何度も繰り返し話すことによる児童の精神的苦痛を少しでも和らげる目的で行うものです。

法廷でも使用できる、精度の高い供述証拠を聴取することをめざした面接方法の総称は、「司法面接」と呼ばれており、代表者聴取も司法面接に含まれるため、警察、児童相談所、検察庁の間で「司法面接」と呼ばれることが多くあります。

Q 代表者聴取を行う基準や根拠は？

A 事件や犯罪の種類が限られるとか、何歳以下の児童に限られるという明確な基準はありませんが、基本的には、児童福祉法における「児童」（18歳未満）を対象として実施しています。

代表者聴取を行う根拠は以下のとおりです。

【根拠】

- ・児童を被害者等とする事案への対応における検察及び児童相談所との連携について（通達）（令和4年4月1日、警察庁刑事局刑事企画課長ほか）

※平成27年10月28日に元通達が発出されて以降、更新

（一部抜粋） 1 基本的な考え方

児童からの事情聴取については、繰り返し重複した事情聴取が行われる場合には、児童にとって過度な心身の負担となるおそれがあるほか、誘導や暗示の影響を受けやすい児童の特性により供述の信用性に疑義が生じるといった指摘もある。

こうした指摘に対し、関係機関の代表者による聴取は、児童の負担軽減及び児童の供述の信用性担保の双方に資する有効な聴取方法であるとの認識の下、検察及び児童相談所との間の連携を強化し、早期の情報共有、聴取方法等についての検討・協議等所要の取組を推進しているものである。

- ・警察庁犯罪被害者支援基本計画（平成28年4月1日）

（一部抜粋）児童を被害者とする事案への対応について、被害児童の負担軽減及び供述の信用性担保のため、法務省及び厚生労働省と連携して、警察庁、検察、児童相談所等の関係機関が被害児童の事情聴取に先立って協議を行い、関係機関の代表者が聴取を行うことを積極的に検討するほか、被害児童から事情聴取するに当たって聴取の

場所、回数、方法等を考慮するなど、被害児童に配慮した取組を進める。

- ・ 刑法の一部を改正する法律案に対する附帯決議

(平成29年6月16日、参議院法務委員会)

(一部抜粋) 八 児童が被害者である性犯罪については、その被害が特に深刻化しやすいことなどを踏まえ、被害児童の心情や特性を理解し、二次被害の防止に配慮しつつ、被害児童から得られる供述の証明力を確保する聴取技法の普及や、検察庁、警察、児童相談所等の関係機関における協議により、関係機関の代表者が聴取を行うことなど、被害児童へ配慮した取組をより一層推進していくこと。

- ・ 性犯罪・性暴力対策の強化の方針

(令和2年6月11日、性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議)

(一部抜粋) 【刑事法に関する検討とその結果を踏まえた適切な対応】

刑事手続の運用の在り方に関しても、児童を被害者とする事案において従来から行っている代表者聴取（協同面接、いわゆる司法面接的手法を用いた事情聴取）の取組について、その対象を障害がある被害者にも拡大するなど、被害者に対する事情聴取の在り方をその供述の特性や心情等に配慮したものとする事……（中略）……のような指摘があることなどを踏まえ、被害者の事情聴取の在り方等について、より一層適切なものとなるような取組について更に検討し、適切な対応を行う。

Q 記憶の書き換えとは？

A 児童の記憶はとても脆いものです。

事件を目撃したり、実際に自分が被害に遭ったとしても、児童はうまくその状況を説明できなかったり、聞き方を間違えれば、児童は簡単に誘導され、実際の体験（事実）と全く違うことを話したりしてしまいます。

特に年齢が低ければ低いほど、話せる単語の数も少ないですし、表現も未熟なのでうまく説明できません。

例えば、

① 誘導

お父さんにゴンってされた。

と申告してきた場合、

お父さんに叩かれたんだね。

と言えば、実際には蹴られていても、児童は『叩かれた』と記憶が書き換えられています。

② 選択肢

『何回叩かれた』という回数を尋ねる聞き方も

何回叩かれたの？ 1回？ 2回？ どっち？

と聞けば、児童は回答の選択肢が1回と2回のみですので、5回叩かれていても『2回』と示された選択肢の範囲で記憶の書き換えが行われてしまいます。

他の例としては、被害時刻や時間の長さの聞き方において

児童が「長かった」と話した場合に、「10分?」「20分?」などと誘導
児童が「深夜」と言った場合に、「12時?」「1時?」などと誘導
してしまうケースが考えられます。

③ 否定

聞き返したりすることも同じです。

児童は

本当に?間違いないの?合ってるの?

と何度も聞き返されると、『自分の答えが間違っていたんじゃないか』と不安になり、
不安の回避から話さなくなったり、回答を変える等してしまいます。

(例) お父さんが叩いたって言ったけど、ほんとに叩いたの?

ほんとにお父さんだったの?

⇒ 児童は『叩かれていないかもしれない』、『お父さんじゃない(又はお
父さんと言ってはいけない) かもしれない』と誤ってしまう。

これらのように、聞き方を間違えることによって記憶の書き換えが行われることです。

Q 代表者聴取を行う年齢は何歳から何歳までか?

A 何歳から何歳までという基準はありません。

明確な基準はありませんが、代表者聴取を行うための事前説明(グラウンドルール)
の理解が可能な年齢が対象となりますので、年齢の下限は、概ね4～5歳頃からとな
りますし、18歳未満の児童を対象として代表者聴取を行っています。

また、知的障害や精神障害を有する成人の性犯罪被害者に対しても代表者聴取を実施
する場合があります。

Q 代表者聴取が始まるまでどのくらいの日数がかかるのか?

A 代表者聴取は、警察、児童相談所、検察庁の3機関が協同で行う面接です。

面接による児童の負担を最小限にとどめ、かつ正確な情報を得るためには、3機関に
よる事前の協議や準備が必要です。

そのため、協議準備等を含め、日程調整して行い、可能な限り早期に実施します。

Q 児童が被害に遭ったかもしれないと気づいたとき学校側はどこまで聞けばいいのか?

A 先生方をお願いしたいのは、『「誰が」、「何をした」まで聞き、それ以上深く聞かな
い。』ということです。

ただ、児童が自ら話し出した場合は、「もう話さなくていい」と遮ったり、質問をは
さんだりせずに自由に話させてください。

児童が話した内容を児童の言葉で、そのまま記録に残してください。

Q 学校内又は教育委員会への報告等で、「誰が」「何をした」以上のことを聞く必要があるときはどうすればいいか？

A 学校内又は教育委員会への報告以外にも、先生方の中での意思統一、児童相談所や警察への連絡のため、場合によっては、やむを得ず「誰が」「何をした」以上のことも聞くことがあると思います。

そのときは、先生が言った言葉、児童が言った言葉、様子をそのまま記録に残し、確実に警察や児童相談所へ引き継いでください。

Q 児童が学校で話した内容だけでは事実が特定できないと思われる場合はどうか？

A 通報するために、事実を明らかにする必要はありません。

児童が被害に遭った疑いがあるという時点で、警察または児童相談所にご連絡ください。

叩かれた、蹴られた、抱きつかれた、押された、物を投げられたなどの『行為』の特定と、相手は誰かという『行為者』の特定で十分です。

回数や日時、場所までは必要ありません。

もし、児童が口を閉ざしたり、言うことをためらっているようであれば、無理に聞き出そうとせず、その時点で児童相談所や警察に通報してください。

Q 「性犯罪（性被害）」と「性的虐待」の違いは？
通報先の違いは？

A 「性犯罪」とは、強制性交等罪、強制わいせつ罪などの性的自由を侵害する犯罪や、公然わいせつ罪、わいせつ物頒布等の罪などの総称であり、通報先は警察になります。

一方、「性的虐待」は、親権者や監護者等の保護者から18歳未満の児童への性的行為と限定的であり、通報先は児童相談所になります。

性的虐待の場合は、児童福祉法にあるように、疑いの段階でも通告義務があります。

性犯罪（性被害）の場合は、詳細が判明していない段階で通報することを躊躇してしまうかもしれませんが、対応が後手になるのを防ぐためにも、是非とも早期の通報をお願いします。

仮に、加害者が同じ学校に通う児童の疑いがある場合、基本的な考え方は、いじめの対応と同様です。現に、「早期に警察へ相談・通報すべきいじめ事案について（通知）」

（平成25年5月16日、文部科学省）では、学校において生じる可能性がある犯罪行為等として、強制わいせつ罪が例示されております。また、警察への通報・相談に係る基本的な考え方として「いじめられている児童生徒の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるような場合には、直ちに警察に通報することが必要」であり、「早期に警察に相談・通報の上、警察と連携した対応を取ることが必要」である旨示されております。

加害者が、同じ学校内の児童ではない場合であったとしても、被害児童の生命、身体又は財産に重大な被害が生じていると認められる場合は、早い段階での警察への相談・

通報をお願いします。

Q 加害者が、同じ学校に通う児童である場合の対応はどうしたらいいか？

A 大変難しい問題であるため、一概にはお示しできませんが、学校での認知直後、早期の段階からご相談いただくことで、教職員の皆様と一緒に考えながら対応を進めることが可能になります。

また、他県の資料ではありますが、「**学校で性暴力被害がおこったら・被害・加害児童生徒が同じ学校に在籍している場合の危機対応手引き**」がインターネット上に公開されていますので、表題をキーワード検索の上、参考資料として活用願います。

Q 低年齢の児童や、コミュニケーションが苦手な児童の場合はどうしたらいいか？

A 児童によっては、話さない又は話せないという場合がありますし、「誰が」「何をした」すら聞き出せないこともあります。

なかなか話そうとしない理由については、家族を守ろうとしている、家族に対し罪悪感を持っている、質問の意味を理解できていない、等様々考えられますし、語彙力不足でうまく説明できない等児童の性格や発達の要因もあります。

そのような児童に対して、質問する側から「叩かれた？」「殴られた？」「どこを？」「顔？頭？腕？」など聞いてしまうと、記憶の書き換えにつながり、正確な情報が得られにくくなります。

また、話すことへの拒否感につながり、さらに話さなくなるということもあります。時間が掛かっても児童のペースで、ゆっくり話を聞いてあげてください。

何があったのかははっきりしなくても、警察や児童相談所に連絡していただいても構いません。

先生方と相談しながら、対応を検討します。

Q 児童が何かしらの被害を受けたと話したが、『許してあげる』とも話している場合は、警察や児童相談所に通報しなくてもよいのか？

A 加害者が児童に対し暴力や性的加害に及んだあとで、「誰にも言ったらだめだよ」「もうしないから許してね、ごめんね」と口止めしたり、謝って終わらせようとしたりするケースがあります。

児童は被害の重大性が理解できていないことが多く、謝られたらそれで終わりという誤った判断をしてしまう場合があります。

児童の「許す」という気持ちを無視することは避けたいですが、児童への影響等を考えると警察や児童相談所が介入すべきと考えますので、児童には「あなたが安全に生活するために必要なことだから、子どもを守るお仕事をしている人に連絡するね。」と説明してあげてください。

Q 児童が「(聞き取りは) 親と一緒にじゃないと嫌だ」と言ってきた場合、保護者を呼び出し、同席させてもよいか？

A 児童は大人の顔色をよく見ており、無意識に保護者の意に添うように話を変えてしまう場合がありますので、保護者を呼び出す前に警察か児童相談所に相談してください。

警察や検察官が行う代表者聴取は、原則1対1で行います。

これは、児童が被害に遭った又は被害を目撃した場合、

① 親には知られたくない(恥ずかしい、心配をかける、怒られるかもしれないなど)

② (以前親に話したのであれば) 前に話した内容と違っているかもしれない

という気持ちを持っている場合があります、それらの気持ちを開放する目的があります。

また、保護者から被害を受けていた場合、保護者の前で真実を話すことにためらいが生じるでしょうし、話したとしても同席した保護者から指示を受けて話したり、あらかじめ口裏合わせをして聞き取りに臨み、保護者に「これでよかった？」と確認することもあります。

事実をありのままに聞き取るためには、1対1が理想です。

「どうして親と一緒にじゃないと嫌なの？」という理由を児童に聞いてみて下さい。

Q 学校で聞き取りを行う場合の注意事項は？

A 聞き取りは、安心して話ができ、秘密の守れる場所(面談室等)で、児童にプレッシャーを与えないように行ってください。

できれば1対1で行ってください。

先生が「1人では不安」と思われるのであれば、話を聞く人、記録をする人の2人でも構いません。

話を聞くととき、おもちゃや携帯電話機、パソコンなど児童の注意を引くものが手元ないようにしていただき、児童が話に集中できる環境にしてください。

児童は興味があるものが目の前にあれば、話に集中できなくなります。

児童が自発的に話している場合を除いて、『誰が』『何をした』を聞き出せたら、それ以上深く聞き出す必要はありません。

児童が話しているのを止めることはしないで、話し続けるのであれば、聞いてあげてください。

児童の話はまとまっていなかったりしても、無理に修正をする必要はありません。

最後まで聞いてあげて、児童の話をそのまま記録して下さい。

このときの聞き取りの様子も記録しておいてください。

《例》

○月×日 午後○時×分頃

放課後、○年●組の教室で○○さんから、

お父さんから裸の写メとられた

と聞いた。

・・・という児童が言った言葉をそのまま記録してください。

話が終わったら、「よく話してくれたね。」とか「よくわかりました。」等の声かけをしてあげてください。

Q 児童から被害について聞いたが、「誰にも言わないで」と言われたらどうすればいいか？

A 「誰にも言わないで」と言われたとしても、大人には児童の安全を確認し、再被害を防ぐ責任があります。

「誰にも言わないでほしい気持ちはわかるけど、あなたが安全に生活するために、子どもの安全を守るお仕事をしている人に連絡して助けてもらおうね。」等と、話すことでいい結果が得られるという方向で伝えてあげてください。

先生が一人で抱え込む問題ではありませんし、学校だけで解決できる問題ではありません。

児童の安全を守るため、警察や児童相談所に連絡してください。

安易に「誰にも言わない」と答えてしまうと、警察や児童相談所に通報した場合、児童は裏切られた、約束を破られたと思ってしまい、大人を信頼しなくなってしまう。

Q 明らかな嘘をつく児童に対してはどのように対応すればいいか？

A 一言に嘘と言っても、先生の気を引こうとしているのか、誰かをかばっているのか、怒られたくなくて言っているのか等、様々な理由があります。

嘘じゃないか？と思っても児童の話に耳を傾け、警察や児童相談所に連絡してください。

警察や児童相談所としては、児童から話を聞いて、その話が嘘だとわかり、児童が安全だと確認できれば、そのことに意味があると考えています。

怖いのは、「普段いい加減なことばかり言っているから、どうせ嘘だろう」という思い込みで、被害者である児童が守られないことです。

また、児童自身が嘘をついているつもりでなくても、誘導され、記憶の書き換えが行われたことで、全く違う内容の話をすることもあります。

不確かな内容の話であっても、事実を確認、解明するために何度も聞くことはせず、すぐに警察か児童相談所に連絡してください。

Q 保護者から、「子どもが学校に話をしたと聞いた、子どもは何を話したか？」と連絡があった場合は、どのように対応するか？

A 学校の方から保護者への連絡はしないでください。

証拠隠滅のおそれや、トラブルとなることが予想されます。

関係機関で打ち合わせしますので、どうしても保護者への連絡をする必要がある場合は、警察、児童相談所へ相談してください。

保護者の方から連絡があった場合は、「お答えできません」とだけ答えてください。

保護者から連絡があったこと、そのときのやり取りをすぐに警察、児童相談所に教え

てください。

今後の対応についても関係機関で打ち合わせをします。

保護者への対応についても、関係機関で打ち合わせをしますので、ご相談ください。

Q 警察や児童相談所への連絡後、教職員等を対象として警察や児童相談所から、どのような聞き取りが行われるのか？

A 事案の内容にもよりますが、一般的には

- ・児童から被害を打ち明けられたときの状況（児童と学校関係者の言葉のやりとりの詳細について、ありのままに）
- ・児童から被害を打ち明けられてから警察や児童相談所への連絡に至るまでの流れ
- ・被害児童について、普段の学校での生活状況

等に関する聴取が想定されます。

また、家族構成等を把握するために

- ・家庭状況調査票

の提出をお願いする場合があります。

さらに、後日の代表者聴取で、被害日時や被害場所の特定をする際に必要となるため

- ・年間行事予定表
- ・時間割

等の提供をお願いする場合がありますので、ご協力よろしくお願いします。